

高良山神籠石と田主丸大塚古墳

市内の田主丸町にある田主丸大塚古墳は、墳長103mの最後の前方後円墳である。前方後円墳は古墳時代の身分社会のシンボルで、6世紀後半にはつくられなくなっている。当古墳は墳形も通常のものとはすこし異なり、別区を持ち、前方部が非常に低いなど、個性の強いもので、6世紀末の築造で、7世紀第2四半期ぐらいまでの使用が考えられている。

一方、高良山神籠石は、列石と水門跡が残っているだけである。関連する上津土塁が天武7(678)年の筑紫国地震を受け、その後修復されていることから、神籠石もそれ以前の築城であることは考えられる。

類似の神籠石の築城年代は7世紀第3四半期、もしくは溯る可能性が高く、高良山神籠石も同じ頃とすると、田主丸大塚古墳への埋葬も行われており、同時並存の可能性すら考えられる。とすれば筑後国府の前身官衙で政治、田主丸大塚古墳への在地豪族の埋葬、軍事的役割を持つ高良山神籠石と重要な三つの施設が並存していた筑後の社会は、どのような位置づけがなされるのか、興味深いものがある。



田主丸大塚古墳後円部外周の石積み



筑後国府・前身官衙（大形建物）

神籠石の今後

記録に残っている山城は、城の目的が新羅の侵攻のそなえたものであると、はっきりしているが、神籠石の場合、それだけが目的か、もう一度検証する必要がある。所在地周辺の環境はそれぞれに特色をもち、個性のある地域社会を形成している。国府が所在する、古代官道が通る、軍団が置かれている、渡来人が多く居住するなど、関連して考えなければならぬものも多い。

神籠石の築城時期についても、同時築城ではなく、順次築城されたとされつつあるが、どの程度の時期幅が認められるか、当時の社会動向と関ってくる。

築城主体者が誰であるのか、在地氏族の姿が見えないのも気にかかる。ポルトガル・オビドスの城寒都市は、小高い丘の上にある歴史遺産で、今も人々が生活をしており、多くの人が観光で訪れている。神籠石も内容がもうすこし明らかになり、人々が訪れるようになることを期待したい。

国指定史跡「神籠石」

国指定史跡 おつぼ山神籠石

所在地：佐賀県武雄市橋町大字大日
指定年月日：昭和41年6月21日 追加指定及び一部解除 平成16年9月30日

佐賀平野の西端にあたる杵島山の山麓、標高66mの小丘陵に所在し、昭和35年(1960)に発見され、昭和37年に全国で8番目の神籠石として確認されました。翌38年に発掘調査した結果、神籠石を特徴づける列石が土塁の基礎であり、その前面に約3m間隔で柵列の柱が存在していたことが判明しました。この調査により、「神籠石は山城か神城か」という長年の学会論争に一定の決着をつけたという意味で、注目されている遺跡です。

列石線は全長1.8km、途中で門跡2か所、谷水を流すための水門が2か所確認されており、全体としては、列石線は地形に合わせて複雑に屈曲しながら、楕円状に丘陵を一周します。

国指定史跡 帯隈山神籠石

所在地：佐賀県佐賀市久保町大字川久保
指定年月日：昭和26年6月9日

佐賀市の北部山麓の標高175mの帯隈山を中心に存在し、切り石を並べた列石線は、約2.4kmの長さで一周します。途中北面に門跡1か所、南面に水門跡推定地3か所があります。列石線全体を俯瞰してみれば、帯隈山から天童岳、清兵衛山にかけ、尾根上を地形に合わせて複雑に屈曲し、途中、小さな谷を渡る場合は、出水に備えて水門を設けていたものと推定され、馬蹄形状を呈しています。列石の用材は花崗岩で、高さ60cm前後の直方体に切りそろえられています。

昭和16年(1941)に発見され、昭和26年には国史跡となり、昭和39年に発掘調査が実施されました。調査の結果、列石は土塁の基礎であり、その背後に高さ2~3mの土塁が版築によって築かれ、また石列前面の平坦部には約3m間隔で木柵が立てられていたことがわかりました。

国指定史跡 鹿毛馬神籠石

所在地：福岡県飯塚市鹿毛馬
指定年月日：昭和20年2月22日 追加指定年月日：平成14年3月19日

標高76mの馬蹄形をした丘陵に幅約70~80cmの石を約2kmにわたって並べた列石を特徴とする遺跡で、『筑後国統風土記』にも記述がみられるように、その存在は古くから確認されています。昭和20年に国史跡に指定され、列石の前後約18mの帯状の範囲が指定地となりました。その後、平成14年に追加指定がなされ、低丘陵であることから、ほぼ全山(約35.82ha)が指定となっています。

主な遺構は、列石を基礎とする版築土塁と西側の谷に存在する2つの暗渠が知られます。版築土塁の中からは直径45cm・長さ3mの柱が検出され、版築土塁を築く工程を考える貴重な資料となりました。また、第1暗渠取水口付近から7世紀代の須恵器が出土し、神籠石の築造年代の推定の根拠となっています。

国指定史跡 高良山神籠石

所在地：福岡県久留米市御井町/山川町
指定年月日：昭和28年11月14日 追加指定：昭和51年12月25日 平成元年10月9日

「神籠石」の名称が起りとなった「高良山神籠石」は、筑後平野の南辺に横たわる水縄山地の西端、高良山西側斜面に位置します。西側斜面の中腹には高良大社が鎮座し、列石は神社背後の本宮山(標高253m)を最高所として、西方に派生した2つの尾根沿いに五つの峰と南谷・北谷の二谷を取り込むように築造されています。城内の面積は、約355,000㎡に及んでいます。南谷の谷底には水門の基底部の石組が見られますが、北谷にも水門が構築されていたと思われます。列石は、総延長1,500mが確認されており、縦・横・奥行きとも約80~90cm前後の石材を一列に並べたものですが、横幅が狭い石材や岩盤を利用した部分も確認されています。また、数段を重ねたところや、岩盤をくり抜いた石材をはじめ込んだ構造の部分もあります。

国指定史跡御所ヶ谷神籠石

所在地：福岡県行橋市/京都郡みやこ町
指定年月日：昭和28年11月14日 追加指定平成10年9月11日

遺跡は標高246.9mのホトギ山の主として北西斜面に広がり、大宰府と豊前国府を結ぶ古代の官道を眼下に望む要衝に位置します。南東部の急斜面を除く外郭線に土塁と石塁を巡らせた外周約3km、面積35万㎡の包谷式(ほうこくしき)山城です。平成5年(1993)から行われた発掘調査によって遺跡の範囲と土塁の構造が明らかになりました。列石は版築工法で築かれた土塁の中に埋め込まれていることがわかり、土塁の前面や内部からは工事用の支柱穴が多数見つかりました。外郭線の北西部に列石を置かない版築土塁があることや城内に未完成の土塁線が存在することも確認されました。7つの城門の中で谷に築かれた中門と西門には大規模な石塁が伴います。とりわけ、通水用の石樋を備え高度な土木技術を駆使して築かれた中門の切石積みの石塁は圧巻です。城内には他に総柱建物の礎石や貯水池の堤防状の石塁なども残っています。

国指定史跡 女山神籠石

所在地：福岡県みやま市大字大草
指定年月日：昭和28年11月14日

女山神籠石は、主として方形の加工砂れき岩が一部に自然石をまじえ、ほぼ馬蹄状に古塚山山頂を3kmにわたって取り囲んでおり、列石の通る北から横尾谷、長谷、源吾谷、産女谷には水門を設けています。地元では古くから知られていましたが、学界で紹介されたのは明治32年。また、昭和10年には福岡県で初めて全体的な実測調査を行いました。昭和46年の県教育委員会の調査では、列石背面には、岩を削って積土したこと、前面には約3m間隔で柱穴があることなど新しく発見されました。

国指定史跡 杷木神籠石

所在地：福岡県朝倉市杷木林田
指定年月日：昭和47年12月7日

「杷木神籠石」は、針目山から筑後川に向かってはりだした尾根の先端部を囲んだ巨石の帯列です。昭和44年に行われた福岡県教育委員会による確認調査の結果、2つの水門と全長2,250mの列石線が確認され、神籠石式山城であることがわかりました。

本神籠石に関する発掘調査は、その後昭和60年、61年に、筑後川側を史跡公園として整備する前段として行われました。史跡公園として整備を計画された箇所については、中世山城(鶴木城跡)としての利用もなされ、各時代の要所にて、要害としての重要な位置にあったことがわかります。しかし、残念なことに、同時にまた、その時期の改変により、神籠石としては損壊を受けていたこともわかりました。調査では、列石の一部と背後に版築上の積土が確認され、神籠石構築の状況についてその成果が得られています。

国指定史跡 雷山神籠石

所在地：福岡県前原市大字雷山/大字飯原
指定年月日：昭和7年3月25日

「雷山神籠石」は雷山の北中腹、標高400~480mの山中に築かれた古代山城です。城の範囲は東西300m、南北700mほどと考えられます。ここからは糸島地方のみならず博多湾や玄海灘まで一望できます。

遺構としては南北の谷部に築かれた水門とそれから東西に派生する列石群をみるができます。北水門は切石を長さ12m、幅10m、高さ3mに積み上げた強固な造りを見せています。また、水門の東西両端からは列石が「ハ」の字形に開きながら尾根頂上に向けて急斜面を登っています。南水門には土塁の基底部に切石を方形に組んだ水樋を設置する「暗渠」様式と石塁の一部に水樋を設けて、そこから流水する様式の2種類の水門跡があります。さらに南水門一帯には城門らしき列石の切れ間を2か所確認しています。

国指定史跡 石城山神籠石

所在地：山口県光市大字塩田
指定年月日：昭和10年6月7日

「石城山神籠石」は、明治42年秋、当時の熊毛郡視学・西原為吉氏(福岡県出身)によって発表され、それまで、九州にしか存在しないといわれていたこの大遺跡が本州でも発見されたので、考古学界の注目するところとなりました。

この「石城山神籠石」の列石線は、南側鶴ヶ峰の近く(標高342m)を列石の頂点として下向きに回り、石城五峰(最高峰の高日ヶ峰362m・鶴ヶ峰・大峰・月ヶ峰・星ヶ峰)を取り囲み、最下部は北水門あたりで、標高約268mまで下っています。列石線の総延長は、約2,533.54mにもおよぶ大規模なものです。列石線が谷間を横切る場所には、高い石垣壁を築き、その中央下部に水門を設け、北水門・東水門・南水門・西水門が発見されています。城門は、表門と裏門に当たるとみられる遺構が発見され、第1門跡(北門)には「沓石」と呼ばれる2個の門扉の柱礎石が遺っています。昭和38・39年の発掘調査の結果、従来知られていなかった人跡、柱穴、版築工法による大土塁が、数百メートルにわたり発見され、神籠石式山城の一つであるといわれるようになっていきました。